

2015 年度 FD 活動評価点検報告書

1. 中部大学の FD 活動組織について

本学における教育活動・改善に向けた教員の資質向上策としての FD (Faculty Development) 活動は、学長を委員長とした全学 FD 委員会のもと、各学部 FD 委員会および各学科組織があり、全学体制の FD 活動ワーキングが中心となって種々の検討を行っている。また、教育活動顕彰審査選考委員会や FD 活動評価点検委員会が図 1 のように組織されており、FD 活動の内容について評価できる体制が整っている。なお、全学 FD 委員会および学部 FD 委員会は、2007 年度まで本学に設置されていた FD 推進委員会、学部での FD に関する諸活動を 2008 年度より新しく改変した組織である。また、大学教育研究センター（教員 3 人、事務員 4 人で構成）が主管部署として、FD 活動の推進、支援を行っている。

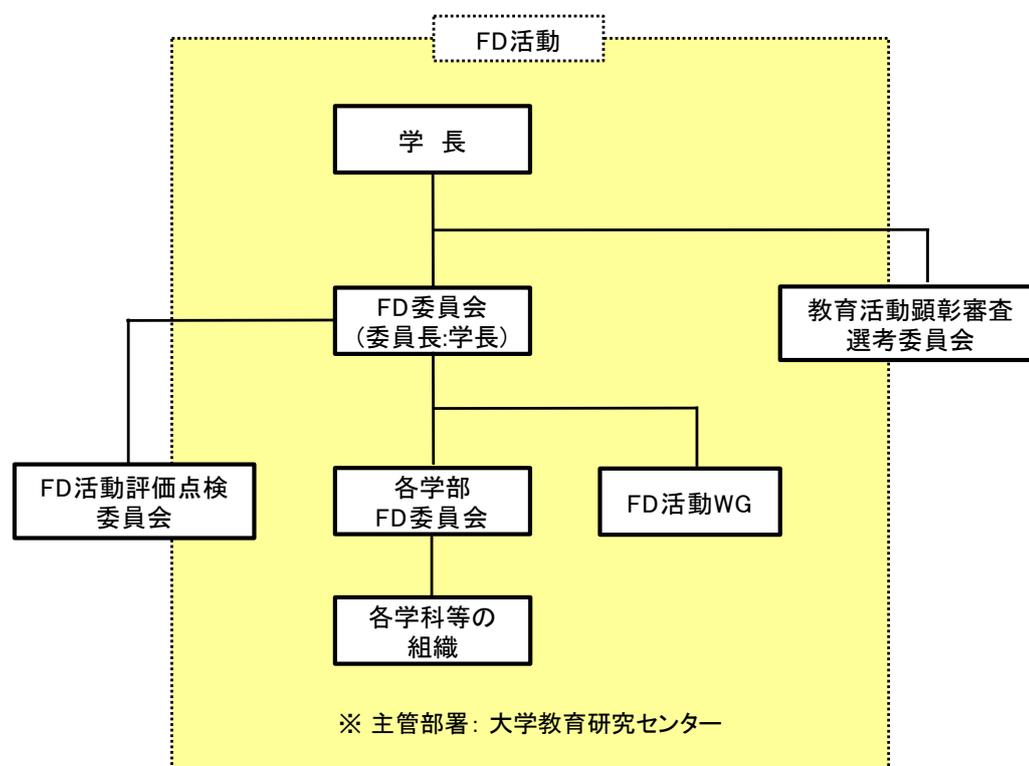


図 1 中部大学の FD 活動組織図

FD 委員会 : 本学の FD 活動全般について、学長を委員長として審議、検討をする。

FD 活動 WG : FD 委員会の専門委員会として、学部代表の FD 委員を中心に主に全学的な活動を企画する。

FD 活動評価点検委員会 : 本学の FD 活動全般について、第三者的な立場にたつて評価点検をする。

教育活動顕彰審査選考委員会 : 教育活動顕彰制度に係る重要事項、および受賞者の審査、選考する。

2. 本学の FD 活動評価点検の対象

本学の FD 活動は、次の表に示すように 3 つの観点から分けられる。広義の FD 活動の目的となりうる「カリキュラム改善」や「組織の整備・改革」に関する諸活動は、FD 委員会の所掌事項でないため、これらを目的とした活動（網掛け部）は、本報告書の内容には含めていない。なお、授業担当者のみの授業改善の活動は、「教育活動重点目標・自己評価シート」と「学生による授業評価、教員による授業自己評価」によって実施され、後者は学内向けに HP 上で公開されている。

表 1 3 つの観点でみた中部大学の FD 活動

【※1】 3 つの観点でみた中部大学の FD 活動（網掛け項目は除外する項目を表す）

目的別にみた FD 活動	対象別にみた FD 活動	形式別にみた FD 活動
1) 授業・教授法の改善	1) 全学対象	1) 会議
2) 教員の資質向上（研究交流を含む）	2) 学部・研究科対象	2) 研修会・懇談会
3) FD 活動の企画・運営など	3) 学科・教育科対象	3) 講演・報告会
カリキュラム改善	(*1) 非常勤を含む	4) ワークショップ・セミナー
組織の整備・改革	(*1) 学生を含む	5) 制度・システムなど(*2)
	授業担当者	

(*1)：対象別 1)～3) で非常勤を含む場合、学生を含む場合

(*2)：授業評価システム、授業改善アンケートの制度の運用やシステムの構築、および出版などが該当

3. 2015 年度の FD 活動の重点目標

FD 活動の重点目標として 2008 年度より 5 年間を目安とした『魅力ある授業づくり』は、2013 年度以降も重点目標とすることが 2012 年度の FD 委員会で決定され、以下の考え方をもとに 2015 年度も継続して FD 活動を進めてきた。

『魅力ある授業づくり』は、学生と教員が協同して行うものです。

魅力ある授業・・・（学生にとって）興味を持って聴ける授業、将来において役立つ授業
 （教員にとって）学生の成長を実感できる授業、学生から感化を受ける授業
 授業づくり・・・（学生が目指す）自主的に学ぶ態度、知識・技術の修得
 （教員が目指す）授業改善、授業スキルアップ
 （学生と教員が目指す）双方向のコミュニケーション

本学では、評価点検の結果から改善を繰り返し、個人レベルから、学部学科を越えたグループ、学部学科、全学を対象に活発な FD 活動を進めてきた。こうした中、教育実践現場である各学部では、以下のような FD 活動の目標設定を行い、FD 活動に積極的に取り組んだ。

(1) 工学部・工学研究科

FD 講演会等に参加し、『魅力ある授業づくり』のノウハウを共有する。

- 1) 中部大学教育活動顕彰制度受賞者による講演
- 2) 『魅力ある授業づくり』に関する企画の開催
- 3) 全学実施の FD 関連プログラム等への参加、連携・情報共有

以上により各教員の『魅力ある授業づくり』の一助とする。

(2) 経営情報学部・経営情報学研究科

- ①FD 委員会主催で、学部全教員に呼びかけ、新学科体制での教育について考える会をテーマごとに作った上で具体案の検討を行い、新学科の運営に反映できるようにする。
- ②夏の教育活動顕彰制度で表彰された先生方を中心に、秋学期に、表彰記念報告会を行い、全教員が『魅力ある授業づくり』に関する情報を共有する。
- ③専門の講師を招待して、経営情報学部主催の FD 講演会を開き、今後の FD 活動の指針とする。
- ④『魅力ある授業づくり』の基礎をなす「学生による授業評価」への教員と学生の参加率を向上させるため、さまざまな機会を通じて促していく。
- ⑤大学院における FD 活動については、研究科独自の授業評価をこれまで実施してきたが、今後の大学院教育の在り方を含め、FD 活動に関する教員の意見交換会を実施する。

(3) 国際関係学部

『魅力ある授業づくり』のために、以下の項目に重点を置き、「実施方法の改善、留意点」などに関する情報共有を促進していく。

- ①英語や中国語を活用した「専門科目」講義の実施
- ②「フィールドワーク」を中心とする学外での教育活動の展開
- ③「国際関係学部 Web ポートフォリオ」の一層の活用
- ④2016 年度の学部新体制に向け、新学科入学生に対して魅力ある授業を展開していくための教員力の向上、ならびに従来の 3 学科所属学生に対する授業・教育の質保証のための方策の検討

(4) 人文学部

2014 年 12 月の中教審で取りまとめられた「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について」（答申）に記される「(3) 大学教育の質的転換の断行」を目標とする。

- ①高校と大学との連携を強化し、スムーズに大学教育への移行を図る。
- ②フィールドスタディ等を通じて春日井市を中心とした地域社会との連携を強化する。
- ③アクティブ・ラーニングによる学生の主体的な学習を引き出す双方向型の教授法の授業実現に向けて取り組む。

(5) 応用生物学部・応用生物学研究科

[学部]

—FD 活動の見える化、共有化を目指す—

- ①『魅力ある授業づくり』に関して、「授業において気をつけていること」等について学部内での報告会、意見交換会を計画する。
- ②『魅力ある授業づくり』に関して、学生による授業評価、教員による授業自己評価、コメントへの回答の回収率向上を具体的目標として学部全体で継続し、取り組む。

- ③『魅力ある授業づくり』に関して、各教員の授業改善に関する重点目標、および授業評価コメント一覧の良かったところ、改善点等を参考とし、自己の授業改善に努める。
- ④各教員は全学 FD 講演会その他の全学レベルの FD 支援活動に積極的に参加する。

[大学院]

2015 年度より新カリキュラムがスタートするにあたって、系統的な教育ができるように 2 科目の担当を 6-8 名の分野の近い複数の教員で分担し、十分な協議をしながら、授業改善に取り組む。

(6) 生命健康科学部・生命健康科学研究科

[学部]

- ①看護学セミナー、臨床検査教育セミナー、理学療法教育セミナー、作業療法教育セミナー、臨床工学教育セミナー、健康スポーツ教育セミナー等を企画し、学部・学科教育に外からの刺激を与える。
- ②春学期と秋学期の終わりに学部全体で授業反省会を行ない、授業の課題や問題点を全教員で共有する。
- ③学期毎にクラス委員と教員の懇談会を開催し、学生からの意見・要望を把握し授業内容に反映させる。
- ④各臨床実習指導者会議を年 1 回開催し、多くの教員と実習指導施設の構成員が参加する。実習指導施設の意見等を学部の教育に生かす。
- ⑤各学科で、early exposure を実施し、1 年生に対する病院見学や企業見学を行なう（職業に対するモチベーションの向上）。
- ⑥模擬試験を頻回行うことによる国家試験対策を充実させる。
- ⑦全学公開講義などに参加していく。
- ⑧「学生による授業評価」回答率を向上させるため、学部内 FD 委員会を中心に具体的な対応策を検討し、教員および学生に働きかけを行う。
- ⑨アクティブ・ラーニングの実態や実例について学部内教員の間で情報交換を行い、当該取り組みに関する学部教員全体のスキルアップを図る。

[大学院]

設置進行中の専攻もあり、本年度は各専攻の整備を行っていく中で、FD に関する問題も討議していく事とする。また、専攻長会議では各専攻間の必要な調整を図るものとする。

(7) 現代教育学部・教育学研究科

[学部]

- ①現代教育学部教員の『魅力ある授業づくり』のための力量向上をすすめる。
- ②現代教育学部における現状の課題について共有につとめる。

[大学院]

- ①学部と連携した授業改善のため授業公開・授業研究を実施する。
- ②研究交流会の実施による教員組織の体制化を図る。
- ③教育モデル構築の取り組みを図る。
- ④院生への情報提供ネットワークを活性化する。

(8) 全学共通教育部

全学共通教育を中心とした新教育改革の理念の下、全学共通教育部のFD活動の継続的推進を図る。教育科を越えたFD活動はどのようにあるべきかについても議論し、各教育科が担当する科目の教育内容・教育理念に関して、教員間の共通理解の形成（懇談会・研修会の実施、教材提供等による）を図る。さらに『魅力ある授業づくり』等に向けての取り組み（授業・教授方法の改善、学生による授業評価、教員による授業自己評価の実施率を高める等）のための学外の研修会や教育関連学会への参加等の各種方法についても検討する。

特に、今年度は、本教育部に配属された教員が非常に多く、経験の深い教員との交流・指導を通じたFD活動を展開したい。さらには第2クールがスタートする年度でもあり、全学共通教育科目の『魅力ある授業づくり』のための改善（授業教授方法・授業内容・体制・施設・設備等の改善・充実と学外の研究会・ワークショップへの参加によるスキルアップ等）を図る。

更には、文科省中教審で計画的展開が要請されている「高大連携・接続」の一環として、本学が進めている附属高校との高大連携授業では全学共通教育部が担当する部分が多く、関係教員とのFD活動を通じて、本学にとっても高校（生）にとっても『魅力ある授業づくり』を検討する。

(9) 国際人間学研究科

文化系が主体をなすが、多彩な学問領域をカバーする構成員からなる国際人間学研究科では、外部との接触による研究・教育能力の向上と、内部における相互接触による啓発・啓蒙の2つが考えられる。このため、二方向からFD活動を推進し、研究科全体のレベルアップを図るように努める。

FD活動の重点目標である『魅力ある授業づくり』は8年目となり、授業評価回答率のアップや授業力向上などのこれまでの目標を継続しつつも、さらに具体的な対策を加えてよりFD活動を活発化する方針を示す学部・研究科が多くみられた。一方、組織改編を行った学部は新たな目標を構築して対策を示している。

4. 2015年度のFD活動の取り組み

4. 1 全学の取り組み

2015年度の全学としての取り組みは、大学教育研究センターHP (<http://www.chubu.ac.jp/FD/>) に詳細が掲載されている。主な取り組みとして、①教員による教育活動重点目標の設定および自己評価、②授業改善の取り組み、③FDフォーラム・講演会、④教員キャリアアッププログラム・FDに関する研修会等、⑤FDカフェ、⑥出版物、⑦教育活動顕彰制度、⑧中部大学『魅力ある授業づくり』プログラムを実施、⑨全国私立大学FD連携フォーラム(JPFF)実践プログラム(オンデマンド講義)提供、等である。また2015年度の課題としてあげたルーブリック評価の活用を推進を図り、2016年3月に授業改善の取り組みの一環としてCUルーブリックライブラリの運用を始めた。これらの現状と評価を記述する。

①教員による教育活動重点目標の設定

教員個人の FD 活動を自己点検することを主な目的として全学の助教以上に提出を求めている教育活動重点目標・自己評価シートは、年度初めに、各教員が教育活動重点目標を設定し、年度末に自己評価を行っている。2015 年度の目標設定者は在籍教員の該当者 475 人中 471 人、自己評価提出者は目標設定者 471 人中 467 人（未提出者 4 人は退職、欠勤等により提出できない者）であった。

②授業改善の取り組み

『魅力ある授業づくり』のための主な取り組みとして、以下の 6 つを取り組んできた。

1) Web による「学生による授業評価」「教員による授業自己評価」

「Web 入力方式」だけであった「学生による授業評価」に「携帯電話・スマートフォン入力方式」を導入して 7 年目となる。2015 年度、「授業評価」の学生の回答率は、春学期約 37%、秋学期約 25%、教員の自己評価回答率は、春学期約 68%、秋学期約 64% であった。学生の回答率は大幅に増加した 2014 年度春学期の約 33% からさらに増加した。秋学期は 2014 年度同様に 25% であり、回答率は維持されている。毎年、秋学期の学生回答率は、春学期に比べて減少という傾向は同様であった。自由記述においては、春学期 3,527 件であり、2014 年度より 8% 増加したが、秋学期は 2,187 件であり、2014 年度より 12% 減少した。一方、『授業評価の結果に対する教員コメント』については、コメント教員数が 2014 年度と比較して春学期で 53 名増加の 459 名、秋学期で 32 名増加の 473 名であった。さらに、コメント率は春学期 58%（2014 年度 52%）、秋学期 61%（2014 年度 57%）と増加した。

授業評価の回答率については、例年同様に学科による違いが大きい点はあるが、その傾向は少なくなってきた。学部・学科としての取り組み、認識の差がまだ認められるが、少しずつ大学全体で学生への働きかけの意識が高まってきている。

2) 携帯電話を活用したクリッカーシステムの提供（授業改善アンケートシステム）

携帯電話による「授業改善アンケート」を援用し、授業中、教員がネット環境を使える場所であれば、学生の反応を瞬時に把握できるクリッカーシステムである「Cumoc（キューモ：Chubu University Mobile Clicker）」を導入して 6 年目となる。研修を行うなど教員が利用しやすい環境とするために 2011 年 7 月に新たに「CumocL」を整備し、2013 年 4 月にはアンケートシステムとして学内に提供を開始した。

なお、「授業改善アンケート」は、春学期 87 件、秋学期 98 件で合計 185 件（昨年度 195 件）の利用であった。

3) 授業改善ビデオ撮影支援制度

授業担当者からの希望による授業ビデオ撮影支援制度の 2015 年度実績は 22 件（昨年度 21 件）で、授業サロンにおける授業担当者の振り返りのための撮影 15 件（昨年度 15 件）を含んでいる。

4) 授業のオープン化制度

授業担当者に申し出ることで、他の教員が授業を参観できるシステムであり、後述の「全学公開授業」「授業サロン」もこの趣旨を基に実施している。

5) 全学公開授業

「全学公開授業」を7件（昨年度6件）実施し、延べ59人（昨年度56人）の教職員の参加があった。

6) 授業サロン

専門が異なる学部を越えた5人の教員による授業見学とピアコンサルティングを行う「授業サロン」が春学期1グループ、秋学期2グループ（昨年度、春学期2グループ、秋学期1グループ）実施され、授業の振り返り、また授業改善のヒントになる点などが意見交換された。今回で18グループとなり、延べで90人の専任教員が参加したことになる。FDネットワークの構築に繋がり、本学のFDの特徴を表す取り組みとして定着している。

7) CU ルーブリックライブラリ

教育の質保証を目指すうえでの成績評価方法の1つであるルーブリックの「蓄積」から「共有」、そして「作成支援」に繋げることを目的として、2016年3月に運用を始めた。

③FD フォーラム・講演会

「大学に求められる学修成果」、「大学の教育体系」および「話し方」に関する内容の3回のFD講演会が開催された。

前者二つは主に現在の大学教育において最も重視されている思考力を育成するために必要なことを歴史と現在の問題点をもとに紹介された。アクティブ・ラーニングなど学生自らが学習することの重要性を再認識することができた。また後者は客員教授（アナウンサー）による『魅力ある授業づくり』に有効な話し方のコツなどを紹介され、授業での活用が期待された。

各講演会には、84人、131人、77人と多くの教職員が参加した。なお、本年の講演会からテーマ等により、県下の大学等、他大学にも案内を行っている。

④教員キャリアアッププログラム・FDに関連する研修会等

教員の授業スキルを含めたワークショップである教員キャリアアッププログラムを実施している。2015年度は、FDに関する研究の第一人者の客員教授を講師として「授業デザイン」に関するプログラムを2回、「学生対応」に関するプログラムを3回開催した。また、アナウンサーの客員教授による「話し方」に関するプログラムを3回開催した。その他に当センター教員による「授業デザイン」に関するプログラムを1回、「Cumocの活用」など授業スキルについての実践的研修が2回開催された。いずれも、本学の教員キャリアアッププログラムのプログラムメニューとしては充実してきており、形態もシステマティックになりつつある。新たに大学に赴任する教員をはじめ、繰り返し開催することで非常勤講師、職員を含めた多くの教職員が体験できるプログラムとなっている。

また、毎年行われる年度初めの新任教員説明会では、学長、事務局長、大学教育研究センター長などから、本学の建学の精神、大学理念、本学のFD活動等を説明している。

教員キャリアアッププログラムに非常勤講師の参加が多いのも本学の特徴といえる。

⑤FD カフェ

FD カフェは、教職員による自由な意見交換の場である。大学教育に関するさまざまなテーマ、学生と直面している必要な知識などの実践的なテーマに関して自由に意見を交わすことで情報やスキルを共有する場を提供することを目的として開催されている。2015年度は春学期2回（昨年度2回）、秋学期3回（昨年度3回）の計5回開催された。ルーブリックによる評価法に関する内容、授業づくりに関する話題を取り扱った。また、春学期と秋学期に各1回ずつ新任教員向けに大学内における疑問解決のための情報交換も行った。非常勤講師の参加も多く、2015年度から個々の教員の工夫などの情報共有として「私の授業づくり」をシリーズ化して第1回目を開催した。参加者が互いの教育力向上を目指しての議論や同じ悩みなど情報共有を行ったことが好評を得ている。

⑥出版物

「教育・研究活動に関する実態資料」「中部大学教育研究」を発刊しており、前者は様々な基礎データを集約し、学内各種制度や対外的な申請や審査の基礎資料として活用されている。また後者は1979年より発刊されてきた「教育資料」を充実させ、新時代の大学教育の理念・手法・改善策などを論じ合う場を提供し、教育改善・質的向上に役立てることを目的に2001年から発刊しており、教員の情報共有の場ともなっており、特に研究論稿は教育研究の分野でも数多く引用されている実績を有している。前者は、大学の情報公表における資料作成の一部に利用されている。

⑦教育活動顕彰制度

2008年度より学部における評価項目の重みを増加し、また個人だけでなく団体、グループに対しても表彰できる特別賞を取り入れた「教育活動顕彰制度」を導入し、毎年前年度の教育活動について表彰しており、2014年度の「教育活動優秀賞」は14人（昨年度16人）、「教育活動特別賞」は、1組織・1グループ（昨年度1組織）が受賞する結果となった。実施要項、審査総評等はHPで公開されている。

⑧『魅力ある授業づくり』プログラム

すべての教員（特に教育歴の少ない教員や新たに本学に赴任する教員）が持続的に教育力の向上を目指すことを奨励し、FDプログラムへの積極的な参加を奨励するために、FD委員会が主催しているFDプログラムを活用して規定の要件を満たしたものに対して、本プログラムの修了証を授与している。修了の要件については、リーフレットやHP上で公開されており、3年間の間に授業サロンまたは全学公開授業実施を必須としたポイント制をとっている。2015年度には9人の教員に修了証を授与した。さらなる本学の特徴あるFDプログラムへの積極的な参加を促すきっかけになることが期待される。

⑨全国私立大学FD連携フォーラム（JPFF）実践プログラム（オンデマンド）

本学が加盟している全国私立大学FD連携フォーラム（JPFF）が運営している実践的FDプログラムは教員が自らの授業を専門分野と教育学の観点から省察できる知識、技能、態度、

特にアクティブ・ラーニングを実践する能力を修得するプログラムである。2015年度は個人で31名、2組織（2014年度個人14人、4組織）が受講した。引き続き、啓発の機会として活用されることが期待される。

4. 2 学部・研究科での取り組み

各学部・各研究科において FD 活動評価点検報告書が作成されており、ここには提出された報告書から 2015 年度の学部・研究科・学科での FD 活動の特記すべき事項を①授業・教授法の改善に関する取り組み、②研究交流を通じた教員の資質向上の取り組み、の 2 つの目的別にまとめた。

①授業・教授法の改善に関する取り組み

- (1) 学部・研究科での FD 講演会の開催（工学部/工学研究科）
- (2) 学部・研究科での研修・セミナーの開催（工学部/工学研究科・経営情報学部・生命健康科学部/生命健康科学研究科・教育学研究科・全学共通教育部）
- (3) 授業反省会（生命健康科学部/生命健康科学研究科）
- (4) スタートアップセミナーの充実に向けた取り組み（工学部/工学研究科・全学共通教育部）
- (5) 公開授業・講師講話・FD 活動に関する伝達講習（工学部/工学研究科・現代教育学部/教育学研究科）

②研究交流を通じた教員の資質向上の取り組み

- (1) 教員の情報発信力向上を目的とした講演会・シンポジウム（工学部/工学研究科・経営情報学部・人文学部・生命健康科学部/生命健康科学研究科・全学共通教育部・国際人間学研究科）
- (2) 学部・研究科での FD 講演会の開催（工学部/工学研究科・応用生物学部・現代教育学部）
- (3) FD 活動報告等（工学部/工学研究科・経営情報学部・人文学部）
- (4) スタートアップセミナーの充実に向けた取り組み（全学共通教育部）

各学部からの FD 活動に関する課題については、1)講演会・セミナーに参加する教員の固定化、参加人数の鈍化があげられるが、これは今後も引き続きの課題である。これ以外には 2)業務の多様化により FD 活動にかける時間が制約されること、3)高まりつつある個々の活動を学部の活動に発展させるための取り組み等、4)現在定着化してきた活動以外の新たな FD 活動の企画、5)年度計画し、早期に参加予定を立てる、6)現状の取り組みから更に活動の機会を増し、その内容を発信しつづけること、などがあげられた。一方で、組織改編に関係する学科からは、今後の具体的方策の立案や教員間の情報共有の重要性があげられた。

4. 3 2015 年度の FD 活動の取り組みの傾向

2015 年度の本学の FD 活動の目的別、対象別、内容形式別にまとめたのが次の 3 つの表である。2013 年度から会議・打ち合わせをこのデータからは外している。FD 活動の目的、対象はバランスがとれているものと判断される。目的の傾向は年度で大きく変わらないが、「授業・授

業法の改善」「教員資質向上のための研究交流」がともに増加しており、『魅力ある授業づくり』への取り組みがより進んでいると考える。対象をみると、学部・研究科よりも全学および学科・教室対象が増えており、FD活動重点目標が学科まで浸透し、現場での具体的な活動に現れているとみられる。また非常勤講師の参加が多いことも特徴の一つである。内容形式については研修会・懇談会および講演・報告会增加しているが、これは各学科の目標としての「情報の共有」を意図した結果と考えられる。

表2.1 目的別にみたFD活動（件数）

目的	2015年度	2014年度
授業・教授法の改善	67	66
教員資質向上のための研究交流	57	40
FD活動企画・運営	20	21
	144	127

表2.2 FD活動の対象別にみたFD活動（件数）

対象	2015年度	2014年度
全学対象	59	52
学部・研究科対象	21	30
学科・教室対象	36	30
	116	112
* 表2.2のうち、非常勤講師を含む	45	35
* 表2.2のうち、学生を含む	24	23

表2.3 形式別にみたFD活動（件数）

内容形式	2015年度	2014年度
研修会・懇談会	31	29
講演・報告会	62	59
ワークショップ・セミナー	25	27
制度・システムなど	15	12
	133	127

※ 上記の3表の合計件数は、重複項目があるため、一致しない。

5. FD活動に関する課題と今後の計画

FD活動全体としては年々充実してきており、『魅力ある授業づくり』の重点目標への意識も大学全体で高まってきており、学科等の組織としての活動は非常に活発になってきている。その一方で、参加教員の固定化、参加者数増加の鈍化など非常勤講師を含めた教員全体にまでは及んでいないことが兼ねてからの課題である。

今後の計画としては、新たに大学に赴任する教員を重点としたFD活動の啓発の継続はもとより、教育の質保証として、学生の成績評価を客観的なものにするために運用を始めたCUル

ーブリックライブラリの活用を推奨する、授業改善アンケートシステム (Cumoc) の機能追加、学修成果に関する調査の 2 回目の試行実施など教育改善につながる活動やプログラムの開催、環境の整備を行っていききたい。また、学生参加型のプログラムとして 2013 年度に実施した『魅力ある授業づくり』作品コンクールを 2017 年度の実施に向けて検討していききたい。